



「津波てんでんこ 近代日本の津波史」

山下文男著

2008年1月25日新日本出版社発行
235p, 1,600円(税別)
ISBN978-4-406-05114-9

最近、地球科学から防災に向けた助言や提案が求められる機会が多くなってきたと感じます。その背景には、大地震や火山噴火といった地球の営みに伴う自然災害による被害を軽減するため、地球科学を1つの基礎として社会全体で災害に対応すべきという合意が形成されつつある(復活しつつある)ことがあげられるのではないのでしょうか。しかし、専門家集団に人間や社会に対する見識と洞察を欠くなら、主張が社会に受け入れられにくいことも事実です。そこに単なる専門知識や技術の断片集ではない、防災地学の難しさと面白さがあると感じるのは、私だけではないでしょう。

さて本書は、在野の津波史・防災研究者が明治以降に日本を襲った8つの大津波について、一般向けに自然科学の研究成果と被害の実相、そして教訓を描きだしたものです。8つの大津波とは、明治三陸大津波(1896年)、関東大地震津波(1923年)、昭和三陸津波(1933年)、東南海地震津波(1944年)、南海地震津波(1946年)、昭和のチリ津波(1960年)、日本海中部地震津波(1983年)、および北海道南西沖地震津波(1993年)です。それらはいずれも100人以上が死亡した歴史的な大災害です。

著者は研究者として冷静に事実を発掘・記録してきた目を縦糸として、少年期に昭和三陸津波を体験し、今漁村に暮らす生活者として津波死ゼロに向けた悲願を横糸として、それぞれの津波に関する自然の様態と、人間・社会の対応を丁寧に記しています。そこで描き出された8つの津波の様態は、地震発生のプロセス(津波地震とも呼ばれるスロー地震から広範囲に大きな震動被害をもたらすタイプのものまで)、海底地形(日本海溝とリアス海岸の組み合わせからなる三陸地方の津波から、浅海が広がり平滑な海岸線をもつ東北地方の日本海沿岸まで)、震央位置(被災地直近のものからチリ津波のような遠地のものまで)、などなど1つとして同じものはないと同時に、ひとつ波にさらわれれば生きて帰ることはできないという共通点があることが分かりやすく記されています。津波の様態の多様さは、時として伝承や過去の体験が間違った思い込みを生み出す要因ともなることに結びつきます。事実、過去の体験に即し当人の考えとしては冷静かつ合理的な行動をとったため、結果的に津波に巻き込まれてしまった人の話が幾例もある

ことが紹介されています。

本書はまた、自然の様態だけでなく人間・社会の対応も、多様でかつ共通性があることを描いています。交通網が未整備で救援も難しかった明治中期の三陸大津波から、戦争の影響濃い昭和三陸津波・東南海地震津波、観測網が整備されながら情報伝達の遅れが被害を生む要因となった昭和後期の津波など被災状況や復興過程には、時代・社会・技術に対応して変化する災害の「個性」が認められます。一方で、判断の過り・怠慢・無知・無関心による被災という、毎度繰り返されている被災要因の共通性をも、本書に鮮やかに描きだしています。

さらに本書は、「即高所へ逃げよ」という単純明快な津波被害軽減の鉄則がありながら、実際には靴を履いて逃げようとしたために津波から逃げきれなかった事例、弱者を助けつつ避難しようとしたために自分の命を失ってしまった事例、を紹介しています。このように大規模災害では、時として「常識的には最適な」避難行動を選択することが困難となることを本書は教えてくれます。

災害の実相を知ることは、防災に対して発言する上で必須の基礎と言えるでしょう。それは自然現象として何が起きたかというだけでなく、災害現場で人どのように行動できるのか、あるいはどのような対応が被害軽減に有効であったのか・有害であったのか、を教えてください。その点から本書は防災に関心のある人、特に防災地学を学ぶ人が読むべき書であると私は思います。エピローグとして簡潔にまとめられている、著者の津波防災への提言は、まさに災害の実相と地球科学的知見を総合することによって得られた現実的・実効的なものと言えましょう。それとともに、私が冒頭で述べた新しい(あるいは今また見直されつつある)地球科学の専門家に必要な素養=人間・社会に対する見識と洞察力=を習得する上で本書は確かな一助となると思います。ぜひ、ご一読をお勧めいたします。

最後に2つの問いを残して本書の紹介を終わらせていただきます。答えは本書の中にありますので、一読の上お答えください。

問い1 「津波てんでんこ」という言葉は、何を意味するのでしょうか?

問い2 この紹介の中で、「地球科学の知見を1つの基礎として社会全体で災害に対応すべきという合意が形成されつつある(復活しつつある)」 「新しい(あるいは今また見直されつつある)地球科学の専門家に必要な素養」と書きましたが、2つの()内に込められた言葉が意味する内容とその根拠について、考察してください。

(産総研 地質情報研究部門 小松原 琢)